

尺八

素朴なものから崇高なるものへ

クリストファー・遥盟 尺八奏者

竹 は、地球上に生息する植物の中でも、とりわけ風変わりな形態を持っています。空洞を持つその形態は、笛を作るのに適しており、アジアの笛のほとんどが竹から作られていることは、それ故驚くことではありません。

日本において竹製品はごく一般的で、日常生活には欠かせないものです。竹は、高度な文化の象徴であり、また宗教的な祭事には欠かせない靈力を吹き込む道具として考えられてきました。このことは、私にとつてとても興味深く、また魅力的に感じる部分です。

尺八の製作過程は、他の伝統的な日本の工芸品と同様に、多くの労力と高度な技術を要します。現在、少ないながらも確固としてその伝統を守っている製管師（尺八製作者）がいます。その人達は、単に伝統を守っているだけでなく、常に新しいアイデアを加えながら伝統技術に取り組んでいます。

製作過程としてはまず、大地から根や土が少し付いている状態で注意深く竹を掘り出し、さつと洗った後、自然油を抽出するため弱火であぶりまします。その時、竹の色が緑から薄茶色へと変化します。そして一週間、冬の直射日光の下で乾かし、更に三〜六年の間ねかせます。十分にねかせ、尺八として使える状態になった後、その竹の根元を適切な長さに切り、丁度よい曲線になるまで再び火であぶります。そうしてから持ち運びに便利のように、二つに切り、中

継ぎを作り内にある節を排除して内壁を鏡で磨きます。また、特殊なメジャーを用いて各々の位置を決めたうえ、指穴を開けます。次に、吹き込む所に歌口（水牛の角）を差し込み、その内側に漆とこの混合物を何層にも塗り、尺八の基本的な調律と、音がバランスよく鮮明に聞こえるか調べます。こうした作業は、尺八製作の中で最も難しく、製作者にとつては常にチャレンジを強いられる作業となります。

竹という素朴な素材を使った尺八から、極めて美しい音が発せられるということ（熟練した製管師の手によつて作り上げられていく過程をも含めて）、このことは尺八が正に素朴なものから崇高なるものへと変容した楽器であることの証明といえるのではないのでしょうか。「禪」の観念の中で、「法器」と呼ばれているように「認識の楽器」である尺八を鍛錬することによつて、人間性もまた高められるのではないかと考えています。

クリストファー・遥盟 ■アメリカ、テキサス生まれ。1972年に来日。竹製作家・山口五郎氏に師事し、82年、東京芸術大学大学院を修了、84年には山口師より「通韻」の号を授かる。その後、世界各地で活躍。ODJ（通韻）の号を授かる。著書「The Shakuhachi, A Manual for Learning」(世界初の尺八英語教材)等がある。現在、国際文化会館芸術プログラム顧問、朝日カルチャーセンター新宿校尺八講師。

